# インストラクター心得　　2018/6/19

## 1.　初めに

インストラクターは下手の棋力向上の手助けをする為にある。
指導者として常に級位者の模範（特にマナー）となる行動することを意識する。
ルール（日本棋院囲碁規約）、審判心得などを確認しておく。
年齢を重ねると物覚えが悪くなるものなので、生徒が覚えてないからと言って
怒ってはならない。（根気よく同じことを繰り返し言い続けることが大切である。）

## 2.　対局指導に当たって

指導対局は下手が正しい手を打てるようにするためであることを意識する。
対局は格言や原則通りに打ち、無理な手を打たないようにする。
（上手がきちんと打っていれば下手も正しい打ち方を学ぶことができる）
自他共にゆとりをもって全局を見渡して着手を決める習慣を付けるようにする。
自分の打った手の意味を下手に説明できるよう心掛ける。
先回りして打つ場所の誘導をせず、下手が考えたことに評価を下すように心がける。

## 3.　認定会の審判として

速やかに会場に入り、生徒の出欠確認や道具の手配などに気を配る。
認定会の対局は普段の教室での対局とは違うことを認識する。
対局中は注意の他は対局者と会話してはならない。
時間内に終局するよう気を配る。
時計は進行をスムースにするために使うもので、時計で勝負するものではないこと。
（勝敗が明らかなときは審判が時計を止めて勝敗の判定を下してよい。）
（時計の押し忘れや残り時間などに気を付けさせる。）
対局終了後の検討は他の対局者のことを考えて静かに行うこと。
入門コースでは終局の理解が出来てない生徒が多いことから次の点も留意する。

- **対局中は注意の他は対局者と会話してはならない。**
- 両者がパスをした際、必要なら交互にダメを詰めてから終局するよう助言をする。
- 石の死活について、両対局者の合意による判断が優先するので、審判の眼からの意見は差し控える。